

67
386

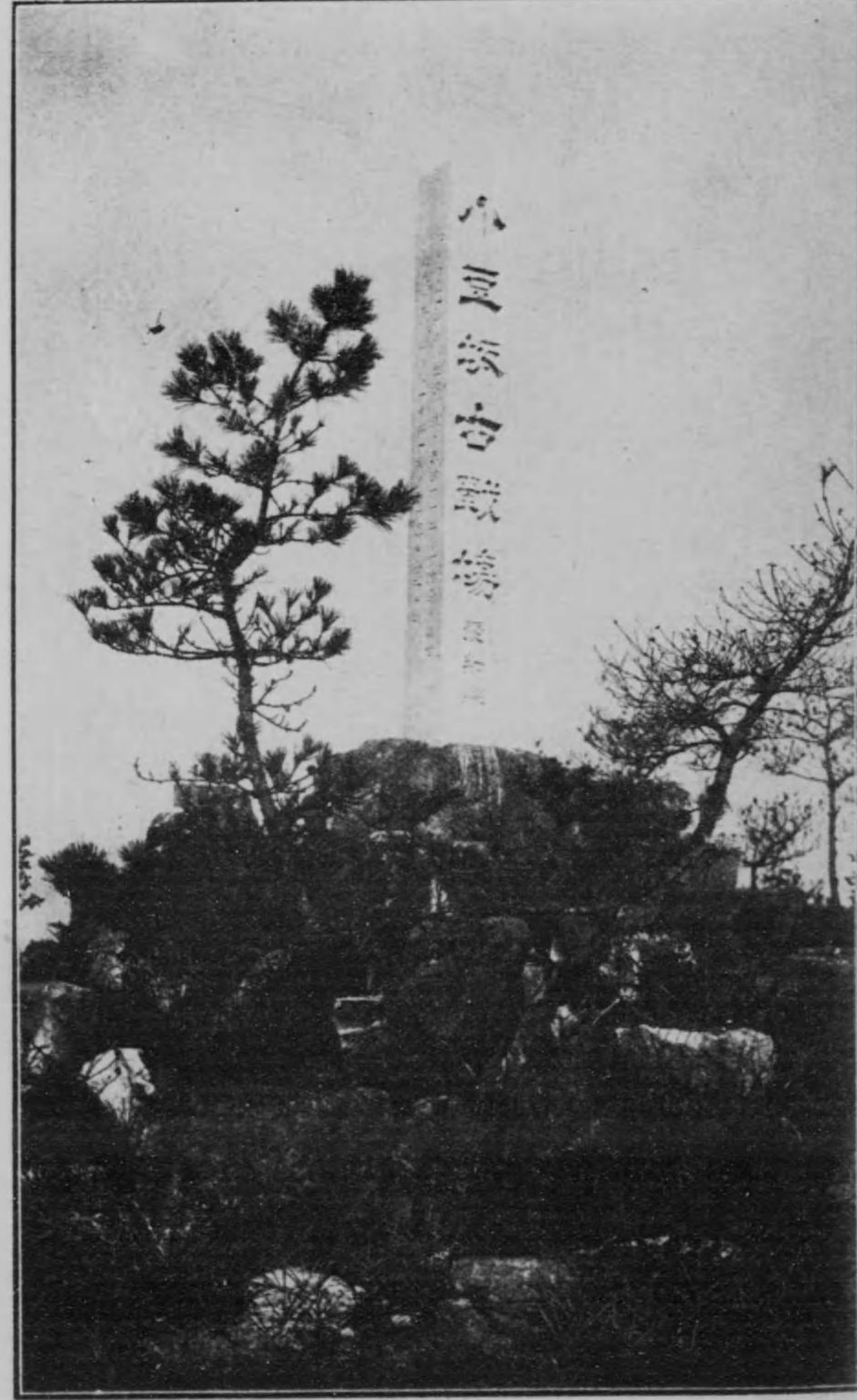
史蹟小豆坂

始



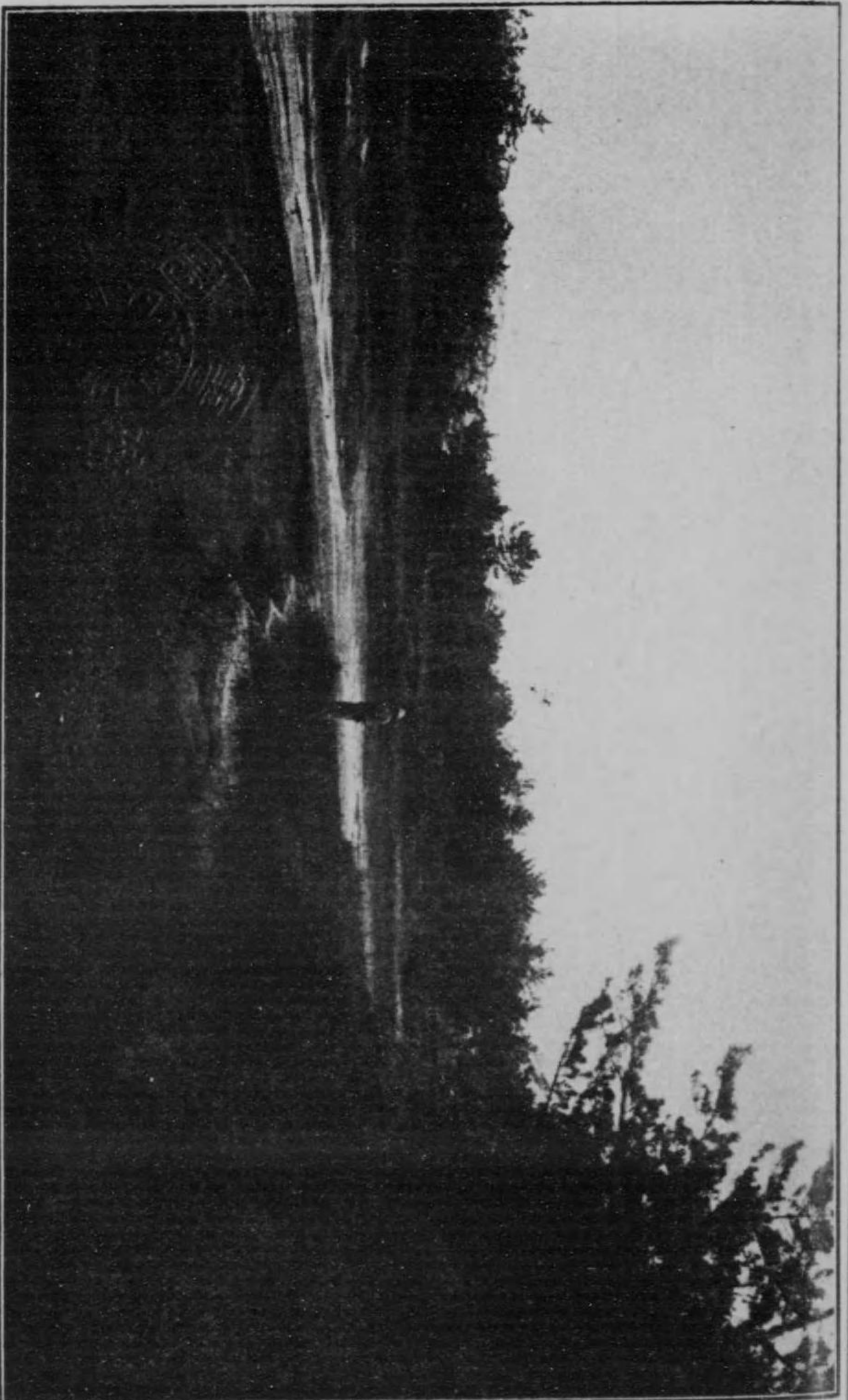
史蹟小豆坂

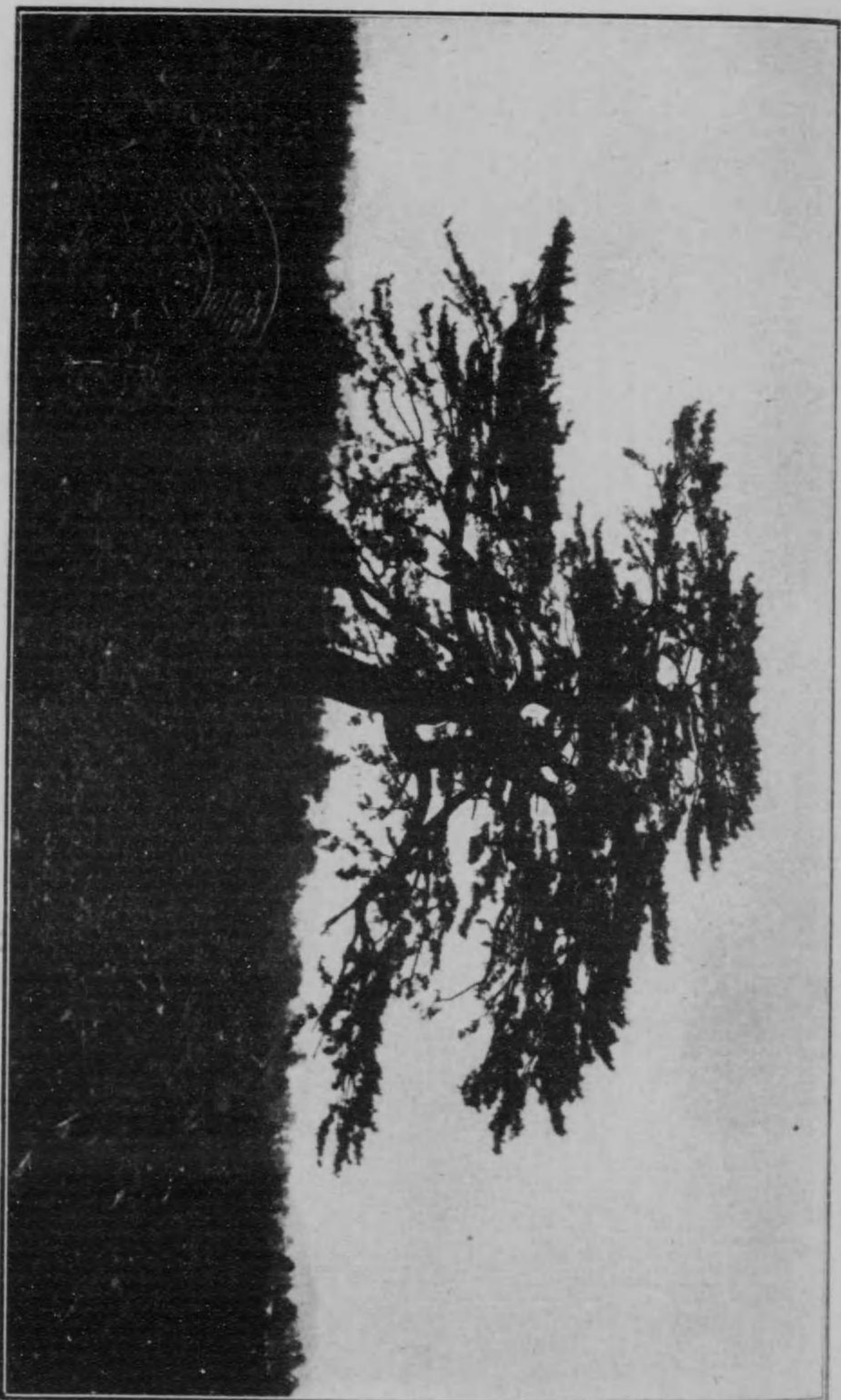
城南道人著



小豆坂古戦場碑

池の洗血



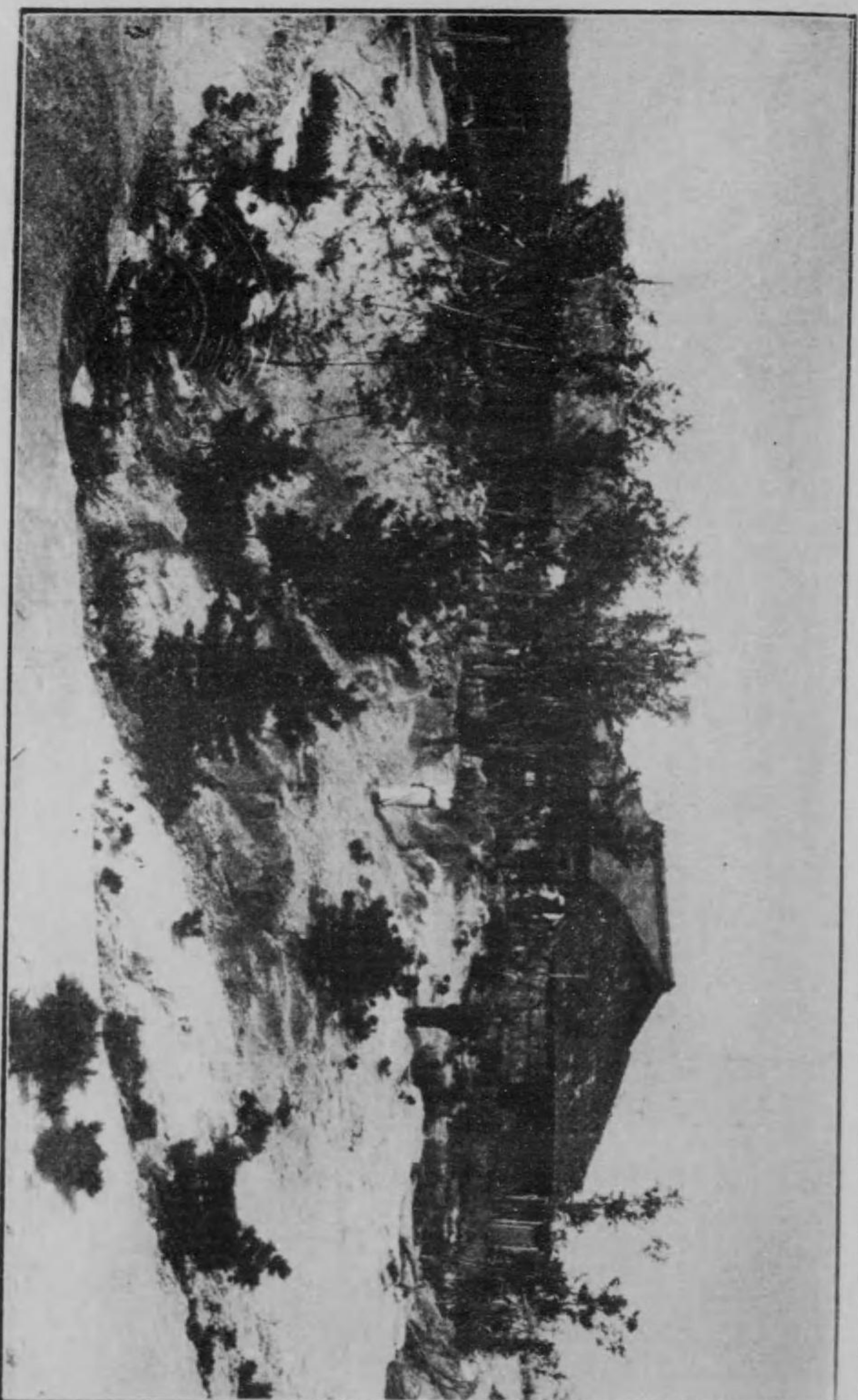


松掛鏡



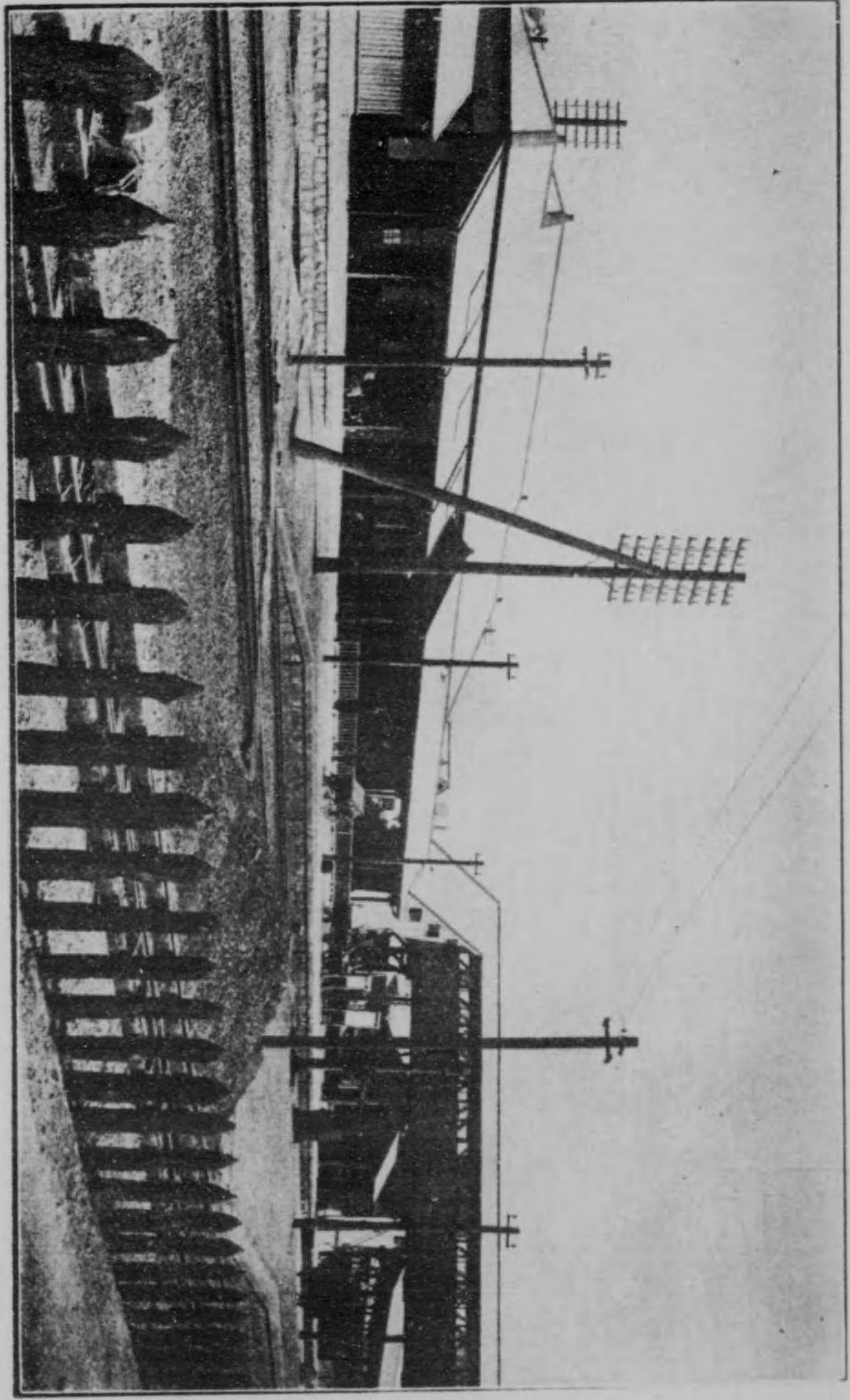


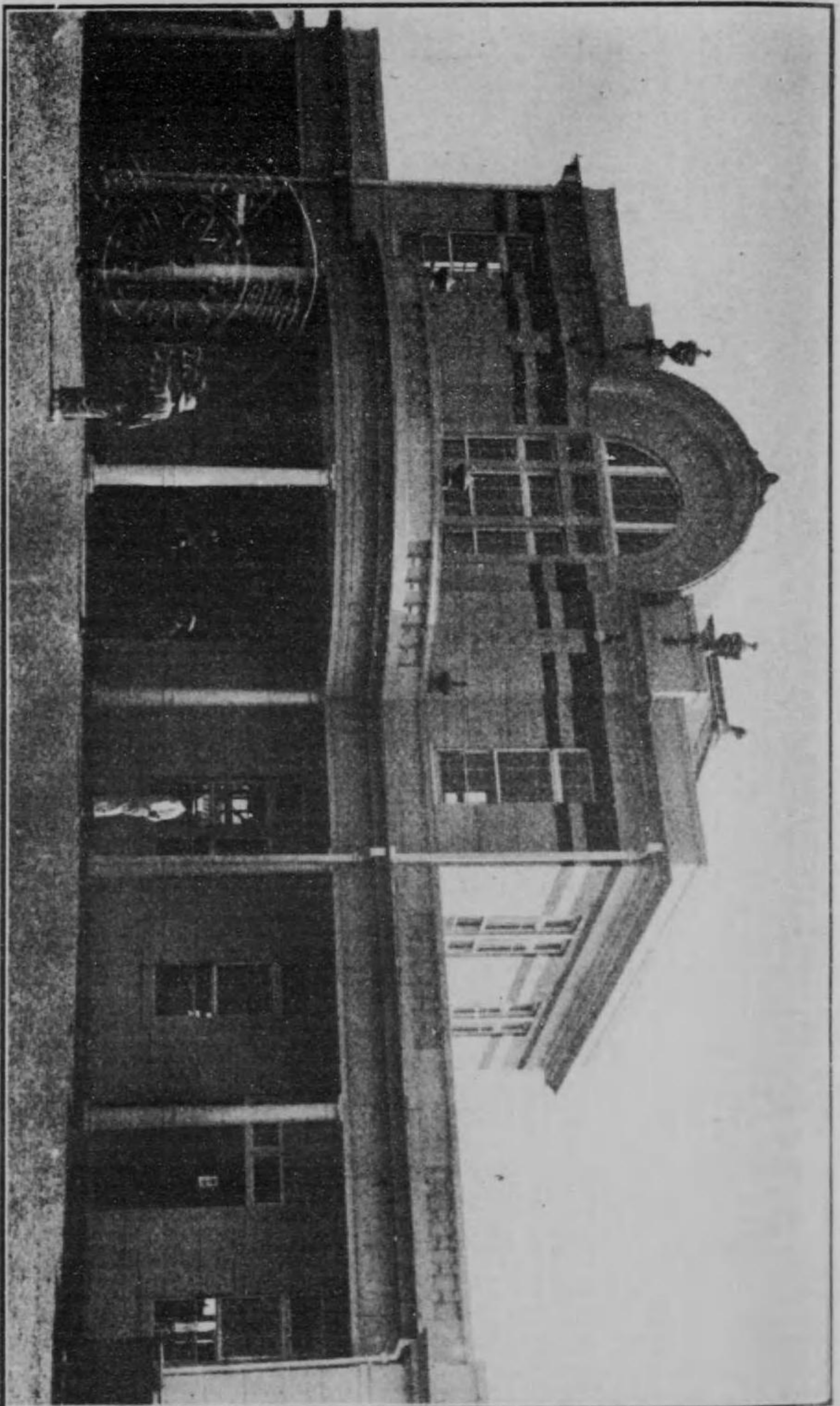
松 立 館



不 動 山 常 光 院

東 海 線 國 崎 驛





西尾線岡崎新驛

67-386

小序

我が畏友城南道人は篤行多く頗文藻に富み今世において得やす
 らざる士なり道人さきに岡崎の花を著し岡崎驛附近の名勝舊蹟を
 紹介して世人の蒙を啓發し趣味を喚起せしもの少なからざり
 また小豆坂の古戦場に關して其の蘊蓄を披瀝して一篇をなせ
 づけて「史蹟あづき坂」といふ記事頗詳細之にまじふるに和歌をも
 つてしたれば足いまだその地を踏まざる余輩をして目之を睹るを
 其の境におきたらむが如くならしむこの著世に出でんか蓋また世
 人を益するもの愈多かるべきは余輩の深く信じて疑はざるるこ
 ろなり道人名は鈴木藤作政事實業の方面には己に令名の噴々たる

大名 11. 10. 4
 内交

ものあれば一言を贅するに及ばざるべし。

大正十一年八月初七

杉の戸主人

長谷部親弘

識す

史蹟あづき坂

城南道人著

○小豆坂

一、天文及永祿年間の古戦場にして往昔は何となく往来せんも心さびしき地なりしか
ども大正六年三月山の中央を作手街道の通じたるより漸く人馬のゆききも繁くなれ
り春はつつじの花美しく夏は松ふく風の涼しさいはん方なく秋は萩の花にかざられ
又は簞狩る人などのむらがり來りてにぎはしく馬馳の馬場常光院郡是製糸場高野山
出張所八百春果實園等世に知らるゝもの出できぬ高きに登れば驛の人家を一目にみ
おろし汽車のゆききも煙筒のけむりも矢作川の白帆も電車の走るも手に取るが如し
されば風光明媚なごいはむもいかゝなれど昔のおもかげ今は更になし。

於もしろとみ山の奥にわけ入れればたけかる人のむれもありけり

又

あさかせにしら帆はらませやはぎ川下り上りする船も見えけり

又

老の身も子守がてらに見るはぎのはなのさかりは山路たのしも

○小豆坂軍記

一、天文十七年戊申三月織田信秀は三河を併呑せんとして大軍にて押しよするよし聞えければ今川義元は加勢として駿州臨濟寺雪齋和尚を大手の大將となし朝比奈備中守泰能を副將となし搦手には朝日奈小三郎泰秀岡部五郎兵衛長教を軍將となし向はしめたりかねて此のよしを岡崎城へは示し合はせられたる事とて岡崎軍は遠州今切本坂まで出で迎へて其の軍を犒ひ此處にて二手に分れ岡部五郎兵衛長教は先陣として山中藤川に陣を取り八日には小豆坂近くに陣取りぬ十日には上和田城を攻めんとて未明に藤川を發せり織田信秀亦織田三郎五郎信廣津田孫三郎信光等に四千餘騎を差し添へ尾州清洲より笠寺鳴海を経て八日には安祥に着き上和田の砦に移り十日には馬飼原に押し出して備を立てんとし總大將織田信秀も安祥に着き先づ弟織田孫三

郎信光を軍將として小豆坂に登らしめんとせりされども山道にて互に先途を見分け兼ね織田勢の先手の小豆坂に登りかかるるとき突然に今川勢と行き逢ひたり織田造酒允信房は左右に下知をなし今川軍は大軍なるぞ味方の小勢をみぬかれては合戦しぬくなるべし早く坂を登れと下知しひたすらあせれども今は早や今川勢は坂の上にあり関を作り押しかかり入り亂れ戦ひぬされば織田信秀の弟與五郎信康四郎次郎信實孫次郎信次赤川彦左工門神戸市右工門等は何れもぬかりなく下知をなし鎗武藤三位入道小瀬修理太夫直澄川崎傳助友勝土肥孫左工門通平大久保平助乘忠等も身命ををします能く戦ひぬ内藤藤助川尻與四郎は今川勢の驍將を組み伏せ首を取り永田四郎左工門重宗名護屋孫五郎秀方は苦戦して討死をなせり今川勢の軍將朝比奈小三郎泰秀の一番に鎗を合せるを見て岡崎軍は今川軍を救はんため先手に進み左を討ち右を破り織田三郎五郎信秀を追ひ崩し三町あまり逃るを追ひかければ敗軍のものども總大將織田信秀の旗本に崩れかかりて旗本も爲めにもみたてられ盗木戸まで引き退けり之を遺憾に思ふ織田孫三郎信光織田造酒允信廣岡田助右工門直教佐々木隼人佐藤通其弟孫助勝重中野又兵工忠利下方孫三郎匡範の七人は一度に颯と引き返し追ひ來

る今川勢に鎗を合せ散々に突き立てたり此の時織田造酒允織田孫三郎は今川勢の中に馳せ入り命を惜まず奮戦するを見て残る五人も先手を越されたるを無念におもひ同じく今川勢の中に入り亂れ奮戦時をうつせり今川勢は此の七人の決死の爲めに突きたてられしばらく猶豫して進みかねたるを織田勢は是れに力を得て二の備まで守り返し散々に今川勢を突き崩したりこれを小豆坂の七本鎗と世に傳へ賤ヶ岳の七本鎗と共に世に勇名を残したりかくて今や今川勢は敗軍と見えたる時に岡崎軍の中より松平太郎左工門信吉弟松平傳十郎信勝林藤五郎忠満小林源之助重次等を始めとし揃ひに揃ひて威猛けだかに横合より馳せ入り三河武士のきも玉みするは此處なりと織田勢の馬の諸膝より平首かけて切て落し胸掛太腹草摺等當るを幸ひと突き立てなきたて縦横無盡に戦ひしが力盡きてあはれ討死するもの多かりき此の時兩軍の死傷は互に多かりきといふ今川勢の軍將岡部五郎兵工長教は是を見て織田勢は疲れたるぞ息を繼がせず責め立てよと一同に勢を付けて突てかゝらしむ織田勢の隨一の士鎗武藤三位入道は今川勢の小倉與助正孝を一時組み伏せたりしかども三位は遂に與助の爲めに首を取られたり兩軍互に引かじこ入り亂れ入り替りしばしの間は戦ひしか

ども織田勢は小勢なれば永く戦ふほど味方の不利なるを覺り遂に軍を返し上和田の城に引きあげ津田孫三郎信光に上和田を守らせ安祥の城に織田與五郎信康を残し總大將織田信秀は尾州さしてぞ歸りたる此の合戦始のほどは織田勢の勝にて後には今川勢の勝なりされば互角に見ゆれども今川勢の勝と見て可ならんか織田勢の退きし後は今川勢の大將雪齋和尚は副將朝比奈備中守泰能と暫く三州に滞留し諸軍の沙汰の終るを待ち凱歌を擧げて駿州にぞ歸りける是より岡崎城の武威は遠近に輝き一時織田氏に心を寄せたる人も歸順をなし歸順せざる人も窈におそれの心をいたくに至れりといふ。

あづきざか七本鎗のすこければ手にあましたりあづまたけをも

又

身を捨ててはまれも高き三河武士の花と散りゆく事のをしさよ

又

徳川の名を流したるみなもこのたゝかひにありと知らなん

○小豆坂上和田軍記

一、永祿六年癸亥九月一向宗一揆の各所に起るや岡崎城の譜代の舊臣も日頃老臣に怨みを含むもの又は一向専念の教化に歸依の輩は忽ち針崎土呂佐々木野寺の一揆軍に思ひ思ひに馳せ加はりぬ其の針崎一揆軍に加りたる岡崎城の大剛の武士は蜂屋半之丞久世平四郎浪切孫七郎寛助太夫近藤新次郎黒柳孫左工門黒柳金七郎黒柳金十郎淺井善三郎淺井小吉淺井五郎作渡邊玄蕃允渡邊八右工門渡邊八郎三郎渡邊半十郎渡邊八郎五郎渡邊源藏渡邊半藏渡邊墨右工門渡邊平三郎渡邊源五左工門渡邊半三郎渡邊太郎右工門渡邊平六淺岡新十郎淺岡新八本多喜藏安藤治右工門加藤喜藏加藤治右工門加藤源次郎加藤傳十郎加藤源藏加藤又三郎加藤源七佐野小太夫成瀬新兵衛大塚七藏坂部又六坂部庄之助坂部囚獄之助坂部愛之助坂部造酒介坂部又右工門平岩善十郎土屋長吉川澄文助を始めとし百三十一人なりきかくて一揆軍の總勢は一萬人といへり。

十一月二十五日針崎一揆軍の上和田に押し寄せんときくや大久保黨は將卒僅に百七

十餘人にて小豆坂に陣を取り自ら一戦をなさんと待ちかまへたり一揆軍は大久保黨の小勢にて出でたるは幸なり一騎も残さず討ち取らんと一文字に打てかゝりたりされど大久保黨は深きたくみあり殊更に関を作りて兵を進めず一揆軍の坂下まで押し寄せ来るをまちて射立てければ一揆軍は不意を打たれて死人は忽ち三十餘人となりぬ大久保黨は時こそよければ一同に坂を下り散々に切てかゝれり又上和田にては相圖の螺貝を吹き立てければ神君も忽ち岡崎城より御出馬ありたり一揆軍は渡邊半藏渡邊源藏蜂屋半之丞を先登に奮戦をなし先づ渡邊源藏は岡崎勢の先手に進みし黒田半平を突き倒す之を怒りて岡崎勢の一同に打てかかるや渡邊半藏も遂に鎗を提げて細繩手を引き退く之を見て阿部四郎兵工忠政は渡邊半藏を射たりしかども半藏の鎧よければ裏かゝざりき藤藏甚五郎川田彦十郎喜藤八太夫坂部又六等は皆忠政の射倒す處となれり渡邊源次郎はねらひ寄りて忠政を射る忠政弓手の肘に薄手を負べり此の間に渡邊半藏は身に立つ矢を折り掛け鎗を振つて大久保與一郎を突く與一郎は深手を負で退き植村新六郎は蜂屋半之丞と鎗を合せければ一揆軍は蜂屋半之丞を討たせじと大勢にて救ひ來り岡崎勢は植村新六郎を助け入り亂れ茲に合戦をなせり岡崎

勢の追々加はるを見て取り渡邊半藏も蜂屋半之丞も引き退かんとすれば水野藤十郎忠重なるもの蜂屋半之丞を逃がさじと迫ひかけたり蜂屋半之丞は取返し脛の白き弱武者にして我と鎗を合せんとは甚笑止なりとあざ笑ひつゝ突き伏せんとするを神君は御馬を馳せ自ら鎗を振つて向ひ給へりかくと見るより蜂屋半之丞は驚きあわて鎗をふせて逃げ去れり松平金助なるものは是を見てきたなし返せと大音揚げて呼ばはりければ蜂屋半之丞はかへり見て神君のわたらせ給ふ故に逃るなりと取つて返して金助を突き殺し既に首を取らんとする處へ神君は馬を馳せて憎き奴原をこ動くなと宣へば蜂屋半之丞は大に恐れて又も逃げ去れりかくて寛助太夫は平岩七之助親吉の耳を射れども薄手にて立あがらんとする處へ神君は馬をかけ寄せ鎗を取て向ひ給へば寛助太夫も大に恐れて逃げ去れり是にて一揆軍は皆逃げ去りたるより神君は岡崎城へ御馬を入れ給へり。

二十七日大久保黨はかさねて一揆軍と合戦をなさんとして井内の郷に陣をなせり本多三彌正重は大久保七郎右工門忠世を鐵砲にて打ち殺さんこねらひ忠世も馬より下りて三彌をねらひ雙方互に鐵砲を放ちしが三彌は忠世の爲めに股を射ぬかれ薄手を負て退

けり一揆軍は謀をめぐらし軍を二手に分ち一手は大久保黨をあしらひ一手は妙國寺邊の巖へ乗り出で大久保黨の歸路を遮り前後より急に討ち一門を土井の水田に追ひ込みて皆殺にせんと既に打ち出んとせり此の時蜂屋半之丞は大久保忠俊入道常源の聲なれば敵ながらも氣の毒に思ひたちて遂に妙國寺邊の高原に一騎にて乗り出で乗り廻りてぞ見せにける大久保黨は之を見て蜂屋半之丞の舉動はいかさま次第ありげなり定めて一揆軍は妙國寺を乗り切り我の歸路を遮る計略ならんと悟り早く人數をまごめ上和田に引揚げたり一揆軍は急ぎ二手に軍をいだしたれども早や大久保黨引き揚げたる後にて何の功もなかりけり。

斯る騒亂のうちに永祿六年は暮れて永祿七年甲子となりぬ正月三日神君は大久保黨に針崎一揆軍を押へさせんとして大久保彌三郎を案内者となし盗木戸を眞直に過ぎ小豆坂に押し登り給へり時にはしなくも一揆軍は作岡大平を焼き歸り來りて行き逢へり石川新七郎近藤新一郎大見藤六佐橋甚五郎浪切孫七郎等は踏み止り互に矢砲を放ちしが近藤新一郎が射たる矢の神君の手綱に當りて大に怒らせられ自ら一揆軍に突きかゝり給へば一揆軍は大敗して逃げ去れり就中石川新七郎大見藤六浪切孫七

郎佐橋甚五郎等は名を知られたる勇士なれば馬足をも亂ださず閑々と引き取るさまを神君は遙に御覽あり彼等は一揆軍の中にて随一のもの共なり一人も残さず討ち取れよと御下知あれば御旗下より血氣の勇士は我おそろじと追ひかけ水野藤十郎忠重は一番に乗り付け金の團扇の指物は石川新七郎と見るはひがめか水野藤十郎忠重なるぞ引き返し勝負せられよと詞をかければ石川新七郎は聲高らかにから／＼と打ち笑ひ直に轡を引き返し互に馬を馳せ合せ戦ひしが運や盡きたりけん馬より落つるを其の首取つて團扇の指物に添へ神君の實檢に備へ御威にあつかりたり水野太郎作清久も同じく進んで戦ひ大見藤六を討ち取りたり佐橋甚五郎は大勢に取り籠められて遂に討死をなせり浪切孫右工門のみは神君に鎗にて二度も突かれしも薄手にて逃げ去れり。

正月十一日針崎及び土呂野寺の一揆軍は一同に集り大久保黨が上和田の砦を攻め抜き其の勢に乗じて岡崎の城に攻めよせん軍議を一決し大勢にて大久保黨が上和田の砦に押し寄せたり元來大久保黨は老練の勇士のみなるより屈しもせずひるみせず士卒を勵まし矢砲を放ち時分はよしと門を開き三十六騎の大久保黨は杉浦田中市

川等と敵中に馳せ入り爰を専途と奮戦をなせり大久保五郎左工門忠勝は弓手の眼を久世平四郎に射られしかども其矢をかなぐり捨てて敵を射返し大久保七郎右工門忠世は手を負びしかどもひるまず戦へり一揆軍は多勢をたのみに討たるも斬らるゝもかへり見ず新手をさし替へさしかへて戦へば大久保黨は大略手傷を負びさへかねたる折柄六名の方より土屋甚助忠成筒井甚六忠俊を始めとし十餘騎のもの馳せ付け大音にて岡崎城より數千騎の後詰あるぞその先鋒たる我々の高名するを上和田の人等よ見て置き證人にたゞれよとぞ呼びにける一揆軍は之を聞くや前後より敵を受けては一大事と大に驚き周章へたり岡崎城にては上和田の相圖の螺貝の聞ゆると均しく神君は鎧を取て召されながら御門前にて高紐を締め兜の緒を結び御馬に召され宇津與五郎なるもの御馬の口に取り付けば戸田三郎右工門一人の御供にて早や御馬を馳せ給へり續て御後を追ひて算圖書介重忠内藤三右工門信成河野善九郎正勝植村新六郎家政植村政右工門正勝内藤四郎左工門正成本多平八郎忠勝鳥居彦右工門元忠鶴殿十郎三郎長祐天野三郎兵工康景天野甚四郎天野清兵衛平岩七之助親吉松平彌右工門松平彌九郎松平治郎右工門米津藤藏小栗大六柳原隼之助伊奈市左工門布施彌左

工門渥美太郎兵衛今村彦兵衛永見新右工門等馳せ付けたり一揆軍も追々馳せ加はり互に矢砲を雨の如く打ち掛け死傷をかへり見ず奮戦せり其の時中根喜藏は一番に進み渡邊半藏と鎗を合せ後には鎗を捨て刀を以て互に戦ひしが雙方痛手を負ひ左右に退く鶴殿十郎三郎長祐は追ひかけ渡邊半藏を突く渡邊半藏は重ねくの手負ひとなるを父の渡邊五左衛門高綱救ひに來り終に十郎三郎長祐を突き伏せたり渡邊源五左衛門は猶も鎗を振つて神君に向はんとすれば内藤四郎左衛門正成は渡邊源五左衛門を射たりけり渡邊半藏は我が身に數ヶ所の手疵を負ひながらも父を敵に討たせじと父を肩にかけて退き石川十郎左衛門も内藤四郎右衛門の爲めに兩股を射ぬかれたれば是れをも半藏は救けて引き取りたり宇津與五郎は蜂屋半之丞と組み合ひ蜂屋半之丞の爲めに討たれたり土屋長吉重次は元來門徒なれば是れまで一揆軍にありしかども神君の御味方の小勢にて危しと見て取り一揆軍に暇乞ひをなし鉾を倒にして一揆軍と戦ひ深手を負びたり神君は其心を嘉せられ板に乗せて上和田の砦に引きいれ自ら長刀を打ち振り敵中に入り指揮をなし給へば御旗本ものごも一騎當千の勇を振つて戦へり一揆軍は遂に堪へかねて土呂針崎をさして皆々逃げ去れり日も早や暮れ

たれば神君は上和田の砦に御馬を入れ給ひ土屋長吉の痛手を憐れみ看護あそばれしかども終に死にければ石川家成に命じて其の屍を厚く葬らせ神君は上和田より岡崎城に歸らせ御甲冑を脱ぎ給ふに御鎧に鐵砲の玉の二つ留れるを見て御運目出度御身の恙なきを皆々喜びあひたり此の日の戦に一揆軍は久世平四郎渡邊源五左衛門石川十郎左衛門を始め數十人討たれしが岡崎城も鶴殿十郎三郎宇津與五郎を始め討死したるもの五人に及び雑兵の死傷はあまたありたりといふ。

ちれる身はをしまるれども花蓮さには咲くらんみだのみくにに

又

てきこなり味方ともなりてたかかへる武士斗りかなしきはなし

又

ふたたびも玉にうたれて恙なききみの其の身は神にかあるらん

○小豆坂針崎軍記

一、二月十三日神君は針崎一揆軍の形勢を探らんとして石川又四郎根來十内布施孫左

衛門等二十五人を遣はされたるに己に内通するものありて一揆軍は三十六人の伏兵を設け近く引き寄せ不意に起りたち渡邊半藏渡邊半六蜂屋半之丞寛助太夫等の眞先に進みて打てかかれれば同じくわたり合ひ互に亂れて戦ひしかども石川又四郎は深手を負つて退き根來十内は渡邊半藏に突き伏せられて渡邊半六に首を取られ布施孫左工門は寛助太夫と組み討たれ遂に岡崎軍は大敗して引き退きぬ其後大久保忠勝大久保忠佐は岡崎に至り神君に申上げ今や海内亂れて何時如何なる大敵の襲ひ來らんと斗り難し然るに譜代の家臣にて過半のもの一揆軍に加はり内亂の爲めに空しく日を送り怨敵となるはゆゆしき大事なりされば一揆軍に組みせし諸士の本領安堵の事道場僧俗共に元の如く立て置く事一揆の張本人一命を助けらるべき事の三ヶ條を御採用ありて早く家臣の歸順をなさしめ一揆軍の鎮定に務めさせられん事を願へり又忠勝の父大久保忠俊入道常源も言葉を添へて去年以來一族子孫のもの日々夜々の苦戦に或は負傷をなし或は戦死をなせり此の忠節を哀とおぼし召すあらば忠勝忠佐の申上げたる如く即ち御採用あらん事を是老臣が老後の願ひなりと誠心こめて申し上げければ神君はいつにかはらぬ汝が忠節を余は満足に思ふなりとて二月二十八日上

和田淨珠院に渡らせられ願の通り御朱印を下されたり石川日向守家成は此仰を蒙り先づ歸順をなしたる蜂屋半之丞等を案内者となし高須口より針崎に押し寄せ勝鬘寺内に火を放てば煙にむせびて一揆軍は大に狼狽せり其の時日向守は聲高らかに悉く御許しありたりと馳せ呼び馳すれば僧俗一同に降参をぞなしにける然るに後日に至り昔此の地は野原にてありしに道場を建てたるものなれば道場を破却して元の野原になすべき事を仰せ出され僧俗一同は誓詞に違ふとて驚きあきれたれども家臣の者は歸順をなして今更何とすべき様もなく只遺憾に暮れたるのみなりき二十餘年を経て石川日向守の母の願に依り國中一向宗の寺坊は皆再興を許されて佛徳の廣大なる今の隆昌を見るに至れりといふ。

みほとけのちかひも君のみめぐみも今の世すでに人のかかふる

又

ありがたしかたじけなしと人はみなみ法の道にいり立ちにけん

又

みほとけののりの榮やとくがはのながれの續くもこゝろなりけむ

○小豆坂古戦場碑

一作手街道より右に折れて小豆坂道路をのぼれば山の峠にあり大正四年天皇御即位大嘗祭記念として縣より建てたるなり一は生田の地内にあり一は羽根の地内にありはげしかりし戦ひの跡か此のあたりいしなみ一ツ立つを思へば

又

なきたまのうらみはいづこ虫の音も秋はひとしほあはれなり

又

いにしへを偲べおもひ出の種となれごあはれを添ふる奥山の月

○血洗の池

一 小豆坂道路に添ひ古戦場碑の前に當る細長き池なり此の池の水にて鎗刀などの血を洗ひ清めたりきといふ。

池水のむかしながらににこれるは底にうらみののこるなるらん

又

池ごやま山ご池ごの見えかくれかくれ見えみちあらひのいけ

又

いしぶみのさびしく立てる池の邊に今も悲しごとくつむむしなく

○鎗立松と鎧掛松

一 鎗立松は大西へ通する小徑に添ひて山の頂なる作手街道の東にあり當時の松は枯れて其の跡に植え繼ぎたるものなりといふ又鎧掛松は鎗立松より三町あまり東に當りて山の麓なる生田の地内にあり此のあたり今は桑園なれども昔は低き山にてありきとさき此の松の廻りは二丈にあまり枝は地に伏して一見四五百年を経たるものなることを忍ばしむ俗に此の松を宮松とも扇松ともいへり宮松とは宮の境内にありしより扇松とは形の扇に似たるよりいひ傳へたるものならむか。

ゆみはりのつきものすごくやり立のまつにかかれる夕さびしも

又

矢さけびのおとをまねぶか今もなほ岡邊の松に吹きよれる風

又

よろひをば誰がかけつらんありし世の山路にのこる一本のまつ

○不動山常光院

一本尊は不動明王にして住職加藤清山師が天文永録年間に小豆坂にて戦死をなしたる無縁者の精靈を慰め弔はんが爲め大正八年六月岡崎驛前より此の小豆坂奥山に移轉せし寺なりこの本尊往昔は鳳來寺に安置しあり行基菩薩の作なりといふ靈顯著るしく出世不動明王として名は世に高し

なきたまも昔むす下に眠るらん此のみほごけのふかきめぐみに

又

詣で来る人の日に日にふえゆくは法のちからのひきやすらん

又

きつね火もいまは消ゆらむおくやまも貝かねのおと讀經のこる

○高野山出張所

一本尊は弘法大師にして紀州高野山熊谷寺の出張所なり大正十年五月縣道改修の爲めに境内の狭くなりたるより岡崎驛前にありしを此の小豆坂奥山に移轉せるなり山内に西國八十八ヶ所の靈場あり

鐘の音の夜半もひびけばあづき坂さびしと今はおほはさりけり

又

みほごけのみのりよろこびもろ人のよるひるたざるおく山の路

又

年経てはいくさのあとと知る人も今はあらしなてら立ちつづく

英雄欲制禦英雄兵法六韜無奏功物
 換星移春又暮血池撩亂落花風
 氣豪膽大堪愁訴砲響劍光不身願枯
 骨銷沈三百年秋風秋雨鳴秋樹
 休言僧輩缺精強慷慨悲歌幾戰場果
 罪有誰果何罪家臣相戰戰相僵
 家臣相戰戰相僵威德一嗟劔折銘半
 入草萊半焦土休言僧輩缺精強
 誰移不動大明王白骨青山古戰場般
 若聲流無鬼火哀湍盡處好風光

城南道人

大正十一年九月廿日印刷
 大正十一年十月四日發行

定價金貳拾錢

愛知縣額田郡岡崎村大字羽根字南乾地
 二十三番地三

著作兼 發行者 鈴木藤作

愛知縣岡崎市明大寺町

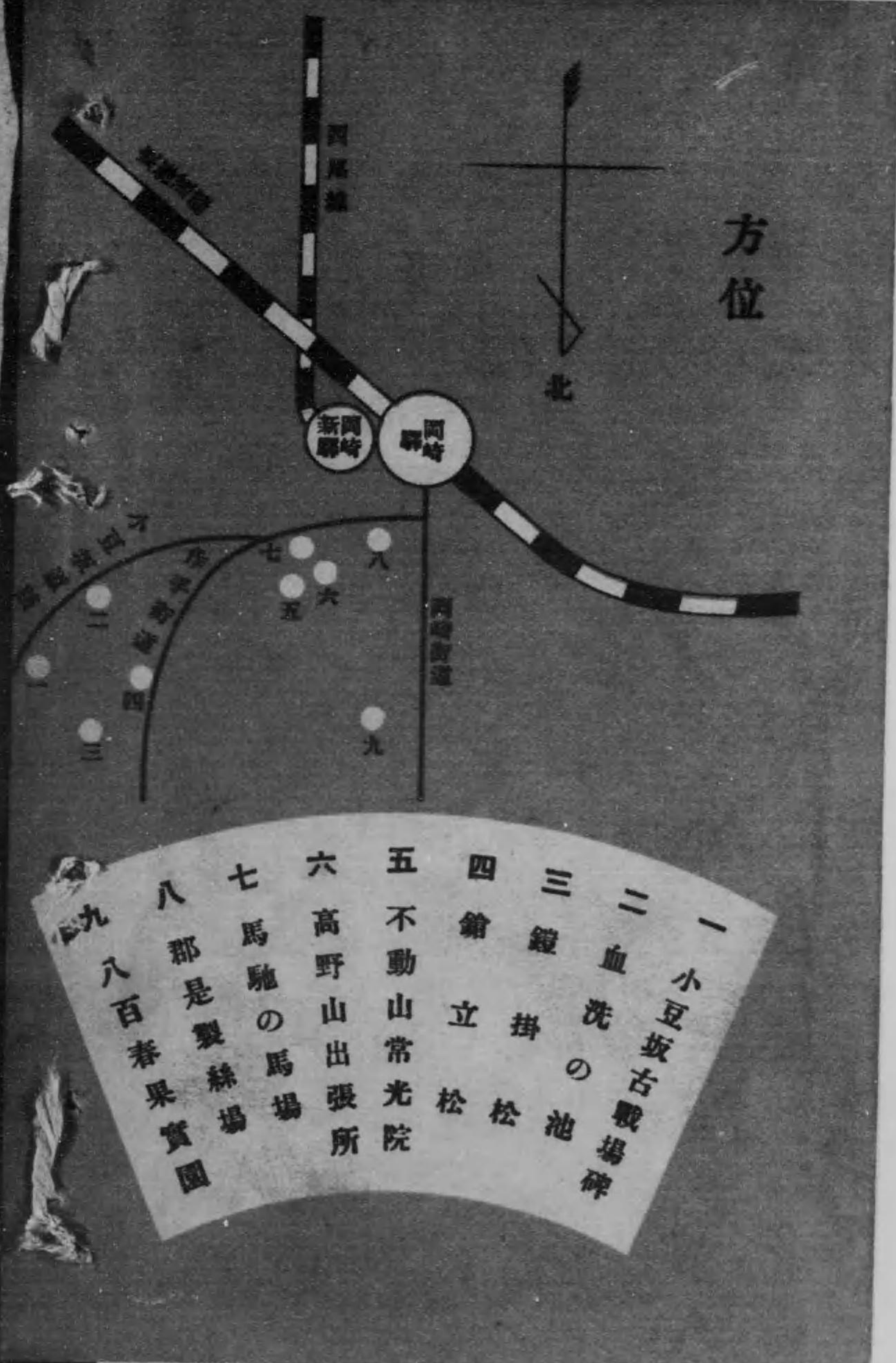
印刷所 三河印刷株式會社

愛知縣額田郡岡崎村大字羽根字奥山
 十八番地ノ五一

發行所 加藤清山

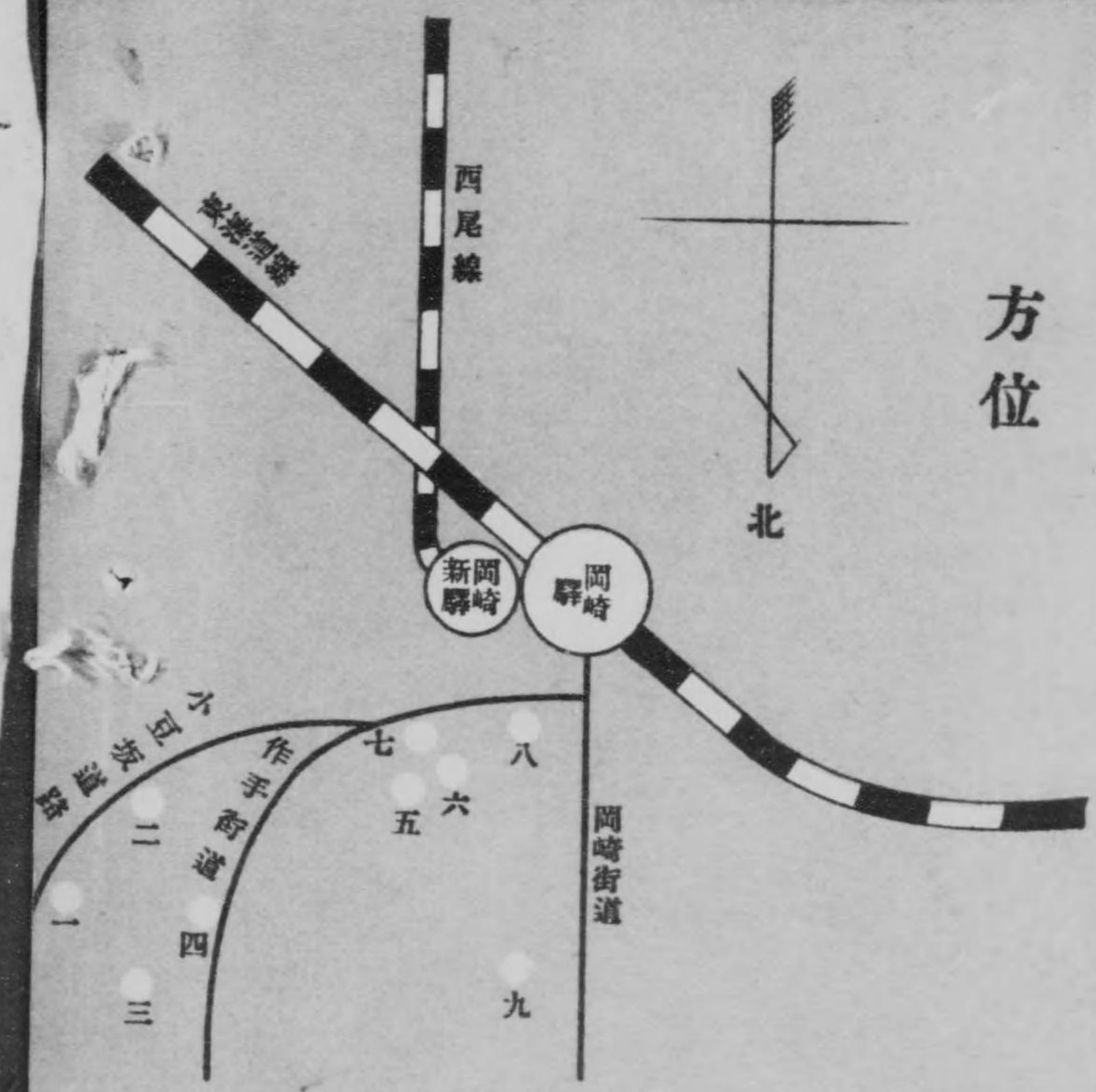
露光量違いの為重複撮影

67
386



露光量違いの為重複撮影

67
386



- 一 小豆坂古戰場碑
- 二 血洗の池
- 三 鎧掛松
- 四 鎗立松
- 五 不動山常光院
- 六 高野山出張所
- 七 馬馳の馬場
- 八 郡是製絲場
- 九 八百春果實園

終

